

価値ある学びを創る

板橋区立前野小学校長 小林 和子

生活科を学んだ子どもが、「町たんけん」でかかわったお年寄りとの交流体験から、福祉の道を選んだ高校生がいる。子どもの頃の生々しい体験や感動が自らの生き方に何らかの影響を与えていると考えられる。

平成14年度から、「総合的な学習の時間」が、小学校、中学校、高等学校で一斉に始まる。自ら問題を見つけ、具体的な活動や体験を通して課題を解決する一連の学びを継続していくことによって身に付く力は大きい。自分で自分の学びを創り上げる、つまり、自学の基礎を身に付けることは、他の教科の学習においても、ひいては生涯学習社会においても学びの基礎・基本といえる。

3年生が、「木と友だち」という活動をした。公園で木登りをしたり、木の実を集めたり触ったりして十分に遊んだ後、木に関する様々な疑問を出した。「この木は何才くらいかなあ。」「木の種類によって、来る虫が違うね。」「根っこは、どうなっているのかなあ。」「・・・子どもの疑問、願いや思いが課題になって、子どもたちの追求活動が始まった。木の年齢を知りたかったA君が、得意顔で「あの木の年齢は、僕の考えでは、18歳くらいだよ。」と報告してきた。

彼は、同じくらいの太さの木は同じくらいの年数が経っているのではないかと、自分なりに予想を立てたのである。そこで、植木屋さんからもらった切り株の年輪から

およその樹齢を予想した。彼は、テープで太さを測りながら公園や校庭の樹木を調べ歩いて、樹木マップを作った。

彼は、試行錯誤しながら自分の考えの道筋、論理をつくりあげ、更に、その論理を活用している。このことを、殆どの場合、本人は意識していないことが多い。教師は子どもの活動に意義付けや価値付けをして、よい学びをしていることを本人に自覚させていくことが大切である。子どもの何気ない発言やふるまいに、価値を見つけて自信や意欲を持たせること、周囲の受容的・指示的な雰囲気づくりなどの環境設定は教師にとって欠かせない支援である。

このような活動を大切にし、経験として積み上げていくことが「自ら学び、考え、よりよく問題を解決する力」の育成につながるのではないかな。

子どもの全ての活動が満足できる学びに耐えられるとはかぎらない。また、自由気ままな好き勝手な活動からは価値あるものは生まれにくい。子どもの問題解決したいという願いや思いを最大限生かしながら、そこで身に付けたい力を明確に捉えた授業を構想できる教師の力量が問われていることになる。

樹齢にこだわりをもったA君は、「木ってすごいなあ。本当に生きているみたいだあ。」と次の課題に挑戦している。価値ある活動をしていると言えないだろうか。

第17回・夏季研修会

—総合学習の「学力」と評価の問題に答える—

【期日】H13. 7/27(金)、28(土)

【会場】上智大学 7号館

【日程】

★1日目

■開会式

■基調講演 上智大学教授 加藤幸次先生

■基調提案

① 埼玉 舟戸小 多田信夫先生

② 山梨 落合小 藤巻 稔先生

■特別報告 World School Network 事務局
グレゴリー・マイケル氏

■実践報告・研究協議全体会

① 神奈川 大岡小 斉藤一弥先生

② 佐賀 開成小 江頭直樹先生

③ 愛知 富木島中 宮川啓一先生

★2日目

■講演会

① 東京学芸大学教授 浅沼 茂先生

② 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長
高浦勝義先生

■全体のまとめ

全国個性化教育研究連盟副会長
永地正直先生

■閉会行事

【1日目】

■基調講演 上智大学教授 加藤幸次先生

今回の基調講演では、「教科学習と総合学習の違い」と「総合学習の評価」について話された。

教科学習と総合学習の違いは、「課題づくり」にある。教科には、単元のねらいがあって、そこから課題がつくられていく。総合学習では、子どもらしい、追求しやすい課題(問題)を子どもたちにつく



らせるところにある。その場合、ウェビングの手法を使うとよい。

次に、今までの評価は、結果を重視するプロダクト評価が多かった。だが、総合学習では、追求する過程を大切にするプロセス評価を大切にしたい。それには、ポートフォリオ評価が適している。

また、課題(問題)を追求していく過程を、メタ認知力とコミュニケーション能力とで支えていくことが、問題解決能力を育成する上で大切であると説明された。(東京・大神田)

■基調提案①

「子どもが解決する問題は生活現実から」

埼玉・舟戸小学校 多田信夫先生

子どもたちは、地域で日々生活している。総合的な学習の時間は、その日々の生活現実の中から、子どもたちが「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決」し、その過程で「資質や能力」を育てる。また、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て自己の生き方」を考える学習である。このことは、子どもたちが学習をとおり、自ら成長する過程において、自己の在り方を振り返り、よりよく生活を改善し、向上して行くことによって今後の自らの生き方を変えていくのである。子どもたちが、解決する問題は、生活現実の中にある。解決する過程で子どもたちが身につける知識・技術・価値を記録し整理することによって総合的な学習の時間の内容・目標を設定することが大切である。子どもたちは、自分たちの身の回りにある人・もの・自然と積極的にかかわり、自分の生活や自分のあり方(生き方)を見つめ、より生活を充実し、よりよく向上しようとする力「生きる力」を身につけていくのである。(埼玉・多田)



■基調提案②

「総合学習ではどんなことを
どのように評価したらよいか」
山梨・落合小学校 藤巻 稔先生

メタ認知力の育成は、学習の目標であり、内容である。それは、子どもたち自身による評価活動を通してしか実現することはない。形式的な自己評価ではなく、活動を吟味し、決定したり作品や活動の評価基準に照らし合わせたりするなど、子どもたちが、必要感を持って行う自己評価を学習活動として位置付けることが大切である。また、子どもたちの手作りの通知表も保護者への説明や自己の育ちを自覚する機会として効果があった。

総合学習では、子どもの育ちは授業以外の生活場面でも表れる。だから、教師は、子どもの生活全体を評価の対象としてみる必要がある。日記や学級通信などを使い、教師の見えない子どもの生活を知る多様で豊富な手掛かりを集めることが大切である。

また、総合学習では、教師の見通し（計画カリキュラム）と実際に子どもが学んだこと（実施カリキュラム）にずれが生ずる。このずれを検証しながら、毎年カリキュラムを更新・改善していかなければならない。活動と内容をしっかり区別し、子どもたちがどんな事実や価値と出会い、どんな資質や能力が育ったのかを明らかにすることが大切になる。

（山梨・藤巻）



■特別報告

「日本の子どもたちに期待する学力」
…「冒険プロジェクト」を通して…
ワールド・スクール・ネットワーク（WSN）事務局
グレゴリー・マイケル氏

リュックサックを背負ったマイケル氏が会場の参加者に歩み寄り質問を始めました。知恵めぐりの様子を再現したのである。WSN



は、世界の子どもたちが、インターネットを通して環境問題を考え行動していく活動を支援している非営利団体である。

WSNのプロジェクトの一つに冒険プロジェクトがある。一昨年から、3年をかけた「日本縦断知恵めぐりプロジェクト」をしている。マイケル氏が、日本各地に息づく知恵を、徒歩で、探す旅である。一昨年は北海道から東京まで、去年は東京から山口まで歩いて「知恵めぐり」をした。今年の秋には四国・九州そして沖縄へと歩く予定である。

マイケル氏は各地で様々な人と出会い、知恵を訪ね、それを毎日WSNのホームページにレポートしている。それを見た子どもたちが、意見を交わしたり自分たちの身近な環境問題と比較したりしてプロジェクトは進む。

例として、台東区の小学生による「下町の知恵探し」と京都市の中学校による「ブラックバス問題」について報告した。

身近な問題に目を向ける子ども、身近な「知恵」や文化を大切に作る子ども、自分で考える子ども、進んで問題に立ち向かう子ども、そんな子どもたちの姿を追い求めているマイケル氏の特別報告であった。（東京・佐久間）

■実践報告①

「総合での子どもの学びの価値を どう捉えるか」 神奈川・大岡小学校 斉藤一弥先生

学校教育目標の具現化に向けて3つの子ども像を設定し、学びや生活での経験から身につけていく資質能力を8つのカテゴリーに分類し、そのカテゴリーごとに評価基準を設定している。それをもとに子どもの学びの要求に即して各学級ごとにカリを編成し、単元の学びが価値あるものになるように考えている。

「町の職人さんに弟子入りしよう」の事例では、1学期は、自分たちのこだわりメニューの実現が中心であったが、2学期以降は、単元のねらいにそって、仕事体験などに積極的に「ひと」にかかわり職業についての自分の考えをとらえ直していくような活動に広がりを見せることを計画している。当初計画した学びの規準と子どもの学びの実態との間に差が生じてきたので、子どもの学びの様子を見取って、価値ある活動内容を見極めて、適切な支援を与え、学びの規準の見直し作業を行っていった。終了時子どもの学びの質が変化していった。適切な見取りがあって価値ある学びがある。

(横浜・馬瀬)

■実践報告②

子どもの学びを高める評価の工夫

—6年生「ザ☆開成食祭り2000をしよう」—
佐賀・開成小学校 江頭 直樹先生

ザ☆開成食まつり2000は、5年生に堆肥作りをし、ジャガイモを育てた経験をもとに→食に

関する個人追究→食に関する情報交換→情報交換ではあきたらなくなり、作る→もっと大きな食まつり(地域の人々との触れ合いへと発展していった。

子どもの学びを高めるために工夫してきたとは、子ども達自身による自己評価活動を視したことで、毎時間ごとに自分で振り返り、次の課題を持つ。→振り返りカードを用い、項目も子ども達で考える。→学習態度から、活動にたいする具体的な課題が見つかるようになり、具体的な振り返りができるようになってきた。その結果、活動にも深まり、地域の人との触れ合いが深まったといふことである。

また、総合の時間だけでなく、子どもの心内を知るために、朝、さわやかタイムの時に、振り返り日記を毎日書かせた。このことにより、子ども達の成長を様々な角度から見取ることができた。

昨年度に引き続き、内容の充実した実践報告であった。本年度は「評価」というテーマに基づいた発表であったが、「子どもの意欲の線グラフ」等、新しい試みも報告された。子ども達自身が活動の中で課題を探し、もつ

くするためにはどうしたらよいかを子ども自身が模索しながら活動に活動を実行させていく…といったように、スパイラルを描いて進んでいけるような総合学習を目指しているという、しめくくりの言葉が心に残っ

(千葉・田)



■実践報告③

「『地域・地球・私』

—3年生の実践を中心に—

愛知・富木島中学校 宮川啓一先生

3年生では、自分探しの旅というテーマで、特に卒業式を総合の最後の学習時間として計画している。これまでお世話になった人に感謝の気持ちを述べたり、自分の成長の跡を報告したり、これから新しい世界にたくましく生きることを述べていく卒業式は、感動の渦となり正に総合的な学習の締めくくりとなる。



自分の生き方とは何か。働くとはどういうことか。2年生の3学期に3日間の勤労体験を行い(地元)、3年生の修学旅行(東京)1日職場体験につなげていく。そしてそこでなければ得られない、夢にもっと近づける場所で、様々な文化や人に接し、自分の生き方を見つめこれからを考えていくのである。そこでは、生徒の手紙や報告からも活き活きと活動している様子がうかがわれた。

総合での評価を考えると、活動する力(プレゼンテーション力・探求力・応用力)と活動する姿(人間としての生き方)の両面で見なければならぬ。どういう力を身につけさせるかことも大事だが、例えば力はあまり身につけていなくてもお年寄りや喜ぶ姿や心から感激して、自分の生き方を見つめていくことに富木島中では重点を置いている。

正に、人間としての生き方をどう求めて高めていったらいいのか。教師が同じ人間として子どもと向かい合っていくことに重きを置いた総合のあり方を考えさせてくれた活気ある実践が報告された。(神奈川・広瀬)

■研究協議全体会

実践報告と質疑応答に引き続いて行われた

全体協議では、評価についての協議が活発に行われた。

評価の切り口としてメタ認知があってもいいのではないかと、評価をどうするかよりいい総合をつくっていききたいとか、様々な意見交換がされた。

「目標・内容」が先か、「活動」が先か、単元計画を立てる際に誰もが悩むところだが、小学校では活動が先にくるのが自然で、一方で目標・内容を表にまとめておく必要があるという意見が出された。

また、総合的な学習の時間だけでつける力なのか、学校教育全体の中でつける力なのかを考えることの大切さも話し合われた。

総合の評価を客観的なものにしようとして測定を考えていくことについて「評価は主観的なものであり、客観的テストはどれも人間が作っているのだから完全に客観的な評価は無い。」という加藤先生の言葉が印象的であった。

単元ごとの細かな評価が本当に必要なのか、本当の評価は、もっと長いスパンで考える必要があるのではないかと評価の問題について考えさせられる有意義な全体協議であった。(神奈川・佐藤)



【2日目】

■講演①

「『学力低下論』に答える

—『学力低下論』の問題の本質とは—

東京学芸大学教授 浅沼 茂先生
立教大学助教授 奈須正裕先生

奈須先生は指導要録の総合的な学習の評価に観点が入っているのは、総合的な学習が間のある第4の領域だからであるとした。この観内容・目標・時点は目標・内容から作られるが、内容なければならない。したがって、内容を意は各校で作ら識した実践を行う必要があ

る。浅沼先生は総合的な学習でどのような能力がつくか話された。基礎



・基本は3R'sだけではなく、これを支える人間の力が基礎・基本の基礎で大切であり、総合的な学習も基礎・基本であるとした。新しいことに対して自分で分類する能力は科学では大切な能力であるが、日本では学力として十分意識されていない。総合的な学習で育った能力は記述で評価する。評価では教師の価値観・哲学が大切になる。奈須先生が学力低下論は知識論・学力論・文化論の違いによるものであるとした。総合的な学習では実現が見込まれる実践的価値を教師が持つことが必要であり、何を教えるのかという目標論・内容論と、どう教えるのかという方法論をセットで考えるのが教師の仕事であると提案した。(埼玉・加藤)

■講演②

「『総合的な学習の時間の授業づくりと評価
ー総合的な学習の時間の本質的な在り方とはー」
国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長
高浦勝義先生

総合的な学習のねらいを確認し、総合的な学習では、各教科のようにスコープとシーケンス(内容)のある学習指導要領を各学校で作らなければなら



ない。単元指導計画では、どのような指導を組み、その過程でどんな内容を指導し、その結果どのような生活者になって欲しいか記述する。評価の観点は教課審の答申に3つ例示されているが、2番目の4つの観点が自己教育力＝問題解決能力から考えると妥当である。この観点に沿って単元目標を書くときには観点を具体化する必要がある。評価の時期と資料を明確化し、資料をどのような方法で見ると考えておく。収集した資料から得点化するため基準を明確にしないと集めた資料の意味がなくなる。教師の指導と評価の一体化するためには、「詳しい単元計画」・「教師の指導・支援、子どもの学習活動」の指導・学習過程に関わる資料と「学習効果の資料」(評価)を絶えず突き合せ、一致・不一致などを見直すことである。また、子どものポートフォリオを授業中などで使い、自己学習力を向上させる必要がある。(埼玉・加藤)

会則の改訂

および

事務局組織分担の変更

7月28日(土)に行われました夏季研修会終了後の理事会において、「全国個性化教育研究連盟会則」の改訂と事務局組織分担の変更が承認されました。新会則および事務局組織分担一覧を別紙にてお伝えします。

なお、長年、本連盟をご指導いただいていた染田屋謙相先生が、この度、会長をお辞めになることになりました。新たな会長に加藤幸次先生がお就きになりました。また、副会長に浅沼茂先生、事務局長に奈須正裕先生、全国連絡担当に佐久間茂和先生がそれぞれ就任いたしました。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒115-0044 東京都北区赤羽南1-16-2-504

03-3903-4780 佐久間茂和

e-mail sakuma.s@ma4.justnet.ne.jp

<http://www4.justnet.ne.jp/~zenkoren/index.html>

全国個性化教育研究連盟会報 第60号

平成13年9月8日発行

編集責任者 事務局長 奈須正裕

編集 広報部 大神田信教